HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | ブロニスワフ・ピウスツキの観た日本 ： 東京音楽学校の女流音楽家との交際を中心に |
| Author(s) | 沢田, 和彦; Sawada, Kazuhiko |
| Citation | スラヴ研究, 43, 205-227 |
| Issue Date | 1996 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/5249 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | KJ00000113408.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# ブロニスワフ・ピウスツキの観た日本
## ── 東京音楽学校の女流音楽家との交際を中心に ──

沢 田 和 彦

### はじめに

ポーランドの革命家にして民族学者ブロニスワフ・ピウスツキは、1866年11月2日[1]にロシア領リトワのズーウフという町に生まれた。1887年、ペテルブルグ大学法学部在学中にロシア皇帝アレクサンドル三世暗殺未遂事件に連座し、サハリン島に15年(後に恩赦で10年に減刑)の流刑となった。この牢獄の島でピウスツキはギリヤークと樺太アイヌの言語を習得し、その民族学的調査を行った。刑期を終えた彼は、ウラジヴォストークのアムール地方研究協会の博物館勤務となる。やがてペテルブルグのロシア科学アカデミーからサハリン原住民の資料収集を委嘱され、エジソン発明の蓄音機、蠟管(録音、再生に用いる蠟製の円筒)、カメラを携えて再度サハリンに向かった。ピウスツキは原住民とその文化の擁護者となり、アイヌの酋長の姪チュフサンマとの間に一男一女をもうけた。

1905年6月、日露戦争による日本軍のサハリン占拠の直前にピウスツキは妻子を残して島を脱出し、極東ロシア、日本、アメリカを経て翌年ガリチア(オーストリア領ポーランド)に帰った。1905年10月初旬から翌年8月3日まで、途中一月半の極東ロシア訪問を除く約8ヵ月間の日本滞在中に、彼は神戸、函館、東京、長崎を訪れて、亡命ロシア人革命家、中国人革命家、作家の二葉亭四迷、ジャーナリスト横山源之助、日本の政界、言論界、教育界の要人、社会主義者、民族学者やアイヌ研究家など実に多くの人々と多様な関係を持った。

ヨーロッパでは、しかしながら、アイヌ研究は正当に評価されず、学位をもたぬピウスツキは定職を得ることができないで、困窮生活を余儀なくされた。1914年、彼は第一次世界大戦必至の気配を察してウィーンへ逃れる。さらに中立国スイスへ避難し、パリに流れつく。そして1918年5月21日、セーヌ河のミラボー橋のたもとで水死体となって発見された。失意と孤独と亡命生活に疲れた末の自殺とされているが、死の真相は今なお明らかではない。それは、実弟ユゼフ・ピウスツキの指揮下にポーランドが悲願の独立を達成するわずか半年前のことであった[2]。

本稿ではピウスツキの日本滞在中の一エピソードとして、彼と東京音楽学校の女流音楽家たちとの関わりを取り上げてみたい。

### I

ピウスツキはマトヴェーエフがウラジヴォストークで発行していた雑誌『極東の自然と人々』に「日本より」という記事を連載している。

ニコライ・ペトローヴィチ・マトヴェーエフ（1865または1866-1941）は、大庭柯公（おおばかこう）によれば「日本［箱館ロシア領事館］で生まれた最初の露国人」で、ウラジヴォストークでカデット党員として革命運動に加わり、市議会議員などを務めるかたわら、印刷・出版業に携わり、「ニコライ・アムールスキイ」のペンネームを持つ詩人でもあった。1919年に日本に亡命し、大阪でロシア語書籍の印刷・出版業、次いで神戸でロシア語書籍商を営んだ[3]。

1893-1898年の間にピウスツキはアムール地方研究協会の会員だったマトヴェーエフと手紙のやりとりをしていた。刑期を終え、1899年にギリヤークの青年エンディンを連れてウラジヴォストークにやって来たピウスツキは、はじめコレイスカヤ（ポグラニーチナヤ）通りの財閥ツィムメルマンの家に仮寓し、次いでアブレクスカヤ通り9番のマトヴェーエフ家に居を定めた。この家は偽造パスポートを所持していた多くの革命家の隠れ家となり、ここでボリシェヴィキの地下活動の秘密の会合がもたれた[4]。マトヴェーエフの詩「自然の継子（Б. О. ピウスツキに捧げる）」は、サハリン原住民に対するピウスツキの愛と、彼とエンディンの歩んだ苦難の道のりを詠ったものである[5]。

クラクフのポーランド科学アカデミー図書館手稿部所蔵の「ピウスツキ・マニュスクリプト」中に、マトヴェーエフがピウスツキに宛てた手紙が2通残っている。一通は1905年11月13日付[6]でウラジヴォストークから発送したもので、雑誌（『極東の自然と人々』のことだろう）を翌年1月1日頃に発刊する予定のこと、近日中に自分が日本に出かけること、金が集まれば雑誌専用の小さなタイプライターを買い、集まった小額の金で雑誌用の印刷資材と鉛版と絵画を買うつもりでいること、印刷資材は既に日本で注文してあること、自分の事業が軌道に乗ればピウスツキも気に入った仕事を恒常的に期待していいこと、もし自分の不在中にウラジヴォストークに来るのであれば自分の事務所に居住し、仕事をするよう勧めている[7]。

もう一通は日付は不明だが、内容からして第一信からほど遠からぬ時期に書かれたものと思われる。これは次のような『極東の自然と人々』誌のプランを伝えたものである。

1）極東諸国の歴史、民族学、日常生活に関わる論文。
2）極東の国家・社会・その他の活動家たちの伝記。
3）これらの国々の旅行記。
4）学術と芸術のニュース。
5）短編小説とルポルタージュと詩。
6）雑報欄。
7）編集局の回答。
8）広告。
9）本文への挿絵。
年間予約購読料　送料別で8ルーブル、送料込みで9ルーブル（4646、t. 2：55）

これら2通の手紙から、マトヴェーエフとピウスツキが親密な関係にあり、前者が後者に援助の手を差しのべていたこと、マトヴェーエフが雑誌発刊前からピウスツキを執筆陣の一員として念頭に置いていたことが分かる。一通目の手紙がきっかけになったのであろ

う、1906年1月初頭、ピウスツキがウラジヴォストークから再度来日した時はマトヴェーエフと一緒だった[8]。

## II

雑誌『極東の自然と人々［東洋週報］』は1906年1月29日[9]に創刊号が発行された。「極東」とは、本雑誌の定義によれば中国、日本、朝鮮、満州、アムール河中・下流域を意味する[10]。本誌は毎週コンスタントに出続けるが、同年7月30日発行の第27号でストップする。この雑誌の全体的概観と発行停止の事由については別稿に譲る。

マトヴェーエフがピウスツキに事前に手紙で依頼したことは実現した。『極東の自然と人々』には後者の記事がいくつか見受けられる。連載ものとしては「日本人支配下の南サハリン」（第4－5号、2月19日、26日発行）と「日本より」（第4－5、7－10、14－15、20－21、23－24号）、その他に「モンゴルの覚醒」（第21号、6月18日）、またこれは筆者不明だが「異民族のなかのБ. O. ピウスツキ」（第24号、7月9日）という記事もある。署名はおおむね「Б. П.」もしくは「Б.」となっている。但し「日本より」の第4号と第23号は無署名だが、いずれもピウスツキの手になるものとみなしておく。なお第5号の「日本より」は神戸で発行されていた週刊露文新聞『日本とロシア』からの転載記事であり、第15号の署名「Б. P.」は「Б. П.」の誤植だろう[11]。その他に第1号所載の「日本の原住民たち－アイヌ」と題した写真や、第2号所載の「アムール河中・下流域地方の原住民たち－イマン川のゴリド人たち」という写真は、ピウスツキが撮影したものかもしれない。

「日本人支配下の南サハリン」は文字どおり、ポーツマス条約によって日本領となった南サハリンのその後の状態を伝えたものである。ロシアが北サハリンを流刑地としていることに日本が危惧を抱いていること、サハリンに派遣された移住・植民問題の専門家・熊谷（くまがい）氏［樺太民政署長官・熊谷喜一郎］とその視察団に加わった鈴木［於兎平］氏の東京帰還が待たれること、もう一人のサハリンの専門家でコルサコフ哨所の最後の副領事だった野村［基信（もとのぶ）］氏が東京に戻ったこと、サハリンの漁区借用の入札に多くの素人の日本人が集まり、借用料を大幅に釣り上げたこと、娼家や芸者をおいた茶屋も出現したこと、地名の多くが変更になったことが述べられている。

「モンゴルの覚醒」では、現在東京の中国人向けの特殊学校「振武学堂」でモンゴルの王のひとりトルハト王が学んでいること、最近「華人青年会」が王歓迎の集会を開いたこと、まもなく王妃も東京に到着し、日本実践女学校に入学の予定であること、内蒙古カラチンの宮廷で2年間王の子供たちの教師を務めていた河原［操子］女史が3人のモンゴルの少女を連れて帰国し、少女たちは現在下田歌子女史の学校で学んでいること、河原女史の代わりに3月に鳥居きみ［君子］女史が出かけたこと、彼女の夫は千島アイヌの研究で有名な若い学者で、モンゴル語とモンゴルの風俗、習慣を学ぶべく2ヵ月後に同じくモンゴルに出発したことが記されている。

君子の夫・鳥居龍蔵は当時東京帝国大学理科大学人類学教室の講師であり、ピウスツキは彼と交わりを結んだ。鳥居はピウスツキを東京西ヶ原貝塚に案内し、また1911年には彼の「樺太島に於ける先住民」をドイツ語版から訳出した。この論文には鳥居の著書『千島

アイヌ』(1903)からの引用が見られる。ピウスツキは君子とも親交を結び、3月5日に彼女が東京を発つ時に見送ってやった(4646、t.2：5－6)。後に君子が出発の情景を回想しつつ、「勇ましき諸声して『鳥居夫人萬歳』と呼ばるゝもうれしく覚束なき日本語もて『サヨナラオクサン』と帽子捧げて呼ぶ露西亜人も亦愛らしく、」[12] と書いた「露西亜人」とはピウスツキのことである。

「異民族のなかのБ.O.ピウスツキ」は、「ギリヤーク人の村でギリヤーク人の民話と歌謡を記録するピウスツキ」と題する写真を添えて彼のサハリンでの異民族調査活動を紹介した短い記事で、「現在Б.O.は日本にいて、自分の研究を整理中である」[13] と結ばれている。

## III

次に「日本より」の内容をかいつまんで紹介しよう。第4号は日露戦争の帰還兵士を凱旋門を作って歓迎する様子が、凱旋門の挿絵2枚を添えて語られている。

第5号は前述のように『日本とロシア』紙からの転載で、1906年1月15日に銀行家倶楽部が東京で盛大な宴会を催し、伊藤［博文］侯と大隈［重信］伯、阪谷［芳郎］大臣が出席したこと、伊藤侯が日本に広く門戸を開いた外国資本に飛び付くことの危険性を警告し、大隈伯も伊藤侯の意見を支持して、「経済的世界共通」なるフレーズにのぼせ上がらぬよう忠告したこと、大隈伯が『東京経済雑誌』の最新号で政府閣僚にも産業界にも見受けられる保護貿易主義への熱中に反対して貿易の自由を擁護したことが、大隈伯の写真入りで紹介されている。この記事が『日本とロシア』の第何号から転載されたのかは不明である。

第7－8号(3月12日、19日)ではまず約2,000人の日本人俘虜の帰国、そして日本人にとって俘虜となるのは極めて恥ずべきであることが述べられる。次に歌会始に話題が移る。今年のテーマは「新年河(しんねんのかは)」であること、国内国外から18,766首もの句が送られてきたこと、第一等を獲得したのは宮内省御歌所録事の妻・遠山稲子女史の「なみならぬ年をむかへて河の瀬のかみしもとなくいはふけふ哉」という歌であること、最も優れた「撰歌」として天皇の前で披露される7首のうちに［在奉天］第六師団第一野戦病院詰［陸軍］看護卒・林清房の句「家にある父はことしもたに河のなかれをくみてとしむかふらむ」や、東京の警視庁巡査の娘・長尾布美子の句「河口はにきはひにけりあらたまのとしの初荷やいまつきぬらむ」が入ったことが紹介される。次いで今年の新年の御進講はエジプトの保護統治に関するものだったこと[14]、伊藤侯が韓国統監府へ出発したこと、その後若干省略して、話題は地震に移り、まもなく大地震がくるというデマが流れて、ピウスツキは知り合いの日本人からすぐさま公園に逃げるよう、またその後荷物をまとめて逃げる用意をしておくよう言われたこと、『東京二六新聞』夕刊に大地震は起こらないから心配する必要はないという大森教授の論説が掲載されたこと、そして片山潜が最近帰国したことが伝えられている。

ピウスツキの記述には若干不正確な点があり、この年1月16日の『東京二六新聞』に載ったのは東京帝国大学教授今村博士の「大地震襲来説」であって、それを否定する大森房吉氏寄稿「大地震襲来の浮説に就て（一）（二）」が2月1日と5日の『時事新報』紙に掲載されたのである。またピウスツキは2月6日の夜、神田三崎町の吉田屋で開かれた片山潜

の歓迎会に出席し、演説した。

第9－10号（3月26日、4月2日）では砕氷船［大礼丸］が2月9日に青森からサハリンへ出発したものの、厚い氷に帰路を阻まれて3月6日にようやく小樽に帰着したこと、樺太民政署長官・熊谷氏が東京に到着してかの地の情報をもたらしたこと、東京地方裁判所で前年9月の日比谷焼き打ち事件の審理が行われていること、その際幾人かの検察側の証人が警察に買収されていたのが判明したこと、本年3月15日に同じ日比谷公園で東京市電値上げ反対の市民大会が開かれたこと、3月25日には社会党党員の発起にかかる集会が開かれ、それが暴動に発展して、自分もそれを見に日比谷公園へ駆け付けたのだが、自分たちが到着するまでの有様を尋ねた相手が実は私服警官だったこと、翌日に7人の社会主義者が逮捕され、そのなかには社会主義者の機関紙『光』の3人の編集員全員が含まれていたこと、3月16日に鉄道国有法案が衆議院を通過し、それに抗議して加藤高明外相が辞職したこと、西園寺内閣は政府の法案を通すために買収という日本の議会では珍しくない手段をいとわなかったこと、それによって逆に国民の信頼を失い、新内閣への期待が裏切られたのは誰の目にも明らかなことが伝えられている。

1905年10月に平民社が解散し、石川三四郎、木下尚江らキリスト教派の社会主義者が『新紀元』、幸徳秋水、堺利彦らが『光』と分裂してそれぞれ新聞を出すことになった。ピウスツキは双方のグループと交際した。ここでもピウスツキの記述に不正確な点があり、電車賃値上げ反対の市民大会が日比谷公園で開かれたのは3月11日と15日であり、日本社会党党員が逮捕されたのは3月15日のことである(15)。

第14－15号（4月30日、5月7日）では現在東京で学んでいる清国留学生は6500人、そのうち女子学生は約200人であること、日清両国の学生による最初の集会が今年2月に開かれ、大隈伯と青木［周蔵］子爵が開会の辞を述べたこと、清国の青年は民主主義の理想を抱懐しているばかりでなく、その四分の三は革命的ですらあること、彼らのリーダーは最近清国を脱出してきた孫逸仙（孫文）であること、東京で昨年から清国人の機関誌『民報』が発行されていること、昨年に彼らの雑誌『二十世紀之支那』の創刊号だけが出たことが述べられている。前述のように、ピウスツキはこれら在日中国人とも交わりを持った。

第20号（6月11日）ではゴーリキイの来訪が日本で待ち望まれていること、ゴーリキイのみならずロシア文学全般の最も優れた翻訳者は長谷川［辰之助。二葉亭四迷の本名］氏であること、メーデーに阪神電鉄の乗務員たちが労働時間短縮と公平な賞与金配当を求めてストライキを起こしたこと、だがロシアと違って日本の官憲は暴力に訴えてこれを鎮圧しようとはしなかったことを述べ、本事件の情報源である『光』紙から、「此同盟罷工は直接見るに足るべき利益を得ざる如しと雖も、資本家をして反省する所あらしめ、労働者は団結の必要を悟るべき点に於て間接の利益は決して少なからざるべし」(16)と引用している。ピウスツキが二葉亭四迷と極めて親密な間柄となって、彼から物心両面で様々な援助を受け、二人で「日本・ポーランド協会」を設立したことはよく知られている(17)。

第21号では1905年に国書刊行会が設立されたこと、その名誉パトロンは大隈伯であること、出版予定の図書は、

1）『古今要覧稿』全560巻

2）『続々群書類従』全5,000巻
3）藤原兼実『玉葉』全68巻
4）『新井白石全集』全400巻
5）『近藤正斎［近藤重蔵の号］全集』全400巻
6）『新群書類従』全3,000巻

であること、ロシアの東洋研究機関の図書館はこれらの図書を購入すべきであることを伝えている。

第23号（7月2日）では4月30日から5月5日まで東京で挙行された征露凱旋陸軍大観兵式の模様が伝えられている。ピウスツキは、「日本の兵士は貴国の女学生ですよ」というロシア通の日本の知人の言葉を引用し、日本では国民と軍隊と最高権力の相互関係が実に牧歌的であって、他のすべての国々から見てこれは羨むべきことであると述べている。

第24号の「日本より」は「教育に関する大臣の訓令」という副題が添えられている。新たに文部大臣に任命された牧野［伸顕（のぶあき）］氏が6月初めに学生の思想、風紀の取締りについて訓令を発し、そこに初めて「社会主義防止」の語句が登場して少なからぬセンセーションを惹起したこと、保守的、日和見主義的な新聞『東京日日新聞』はこの訓令を支持したこと、『時事新報』は訓令に極めて辛辣な批判を加えたこと、最も保守的な新聞『日本』は、訓令が対象とするのは社会主義ではなく「極端なる社会主義」であるとしてこの訓令を擁護したこと、『光』は大臣にしかるべき逆ねじをくわしたことを伝えている。ピウスツキは『光』以外の新聞の反応を同紙所載の記事「牧野文相の訓令」から引いたものと思われるが、『東京日日新聞』は彼の紹介とは違ってこの訓令を批判している(18)。

以上12回にわたる「日本より」の連載記事は、テーマが実に多種多様にわたっている。民族学者であり、革命家であり、文学にも造詣の深かったピウスツキの広い目配りが遺憾なく発揮されており、1906年前半、というより日露戦争直後の日本の様々な側面が浮彫りにされているといってよい。記事の材料は、彼自身の個人的体験と『光』をはじめとする新聞記事の双方から成り立っている。まもなく大地震がくると家主に脅されて身の回りの品をまとめる箇所や、知人から聞いて日比谷公園の暴動を見に駆け付ける箇所は、ピウスツキの日本での暮らしの一面と彼の旺盛な好奇心を彷彿とさせておもしろい。新聞記事は二葉亭もしくは後述の上田あたりが、彼のために翻訳してやったのだろう。

## Ⅳ

前に省略した第8号所載の「日本より」の中程の部分を、若干長くなるが引用する。

> 凶作に打ちのめされ飢餓に苦しむ東北地方からの悲しい知らせが絶えず届き続けており、日本のみならず外国でも寄付金の募集を呼び起こしている。
>
> イギリスとアメリカから数千人が被害者に援助の手を差し延べている。日本では義捐金の募集が行われている。最も購読者の多い新聞の一つ『萬（よろず）朝報』は米の寄付を受け付けている。不幸な人々に援助の手を差し延べたいと願うすべての人々にわざわざ

縫った小袋が配付され、本新聞の編集局はそのような袋を毎日数百個受け付けては、寄付者の指示に従ってその後村々へ送り出している。

東京では飢餓で苦しむ人々のために一連の演奏会が催された。被害を受けた県の出身者である若い学生たちのイニシアチブで催された音楽学校でのある演奏会で、大隈伯が演説を行った。この日本で最もリベラルな内閣の元首相で議会の進歩党の党首は、あらゆる社会事業や進歩的な企図に常に理解を示す。この人物は官僚制機構を敵とし、熱のこもった演説のなかで高齢にもかかわらず（大隈伯は80歳を超えている）両のこぶしを振り回しながら、官僚と、国の広大な地域における凶作という深刻な問題に対する彼らの無関心な態度を激しく非難した。大隈伯の意見はとどのつまり、政府がタイミングよくこの問題に手を打っていたら、飢饉は回避できただろうというものだった。「政府に統治されている人々がその政府のもとで飢饉に苦しんでいる、そういう政府は今自己の無力さと無用さを証明しているのであります。」拍手の嵐が、若々しい魂を持った尊敬すべき長老のこの演説に対する返答だった。

この演奏会に行って、日本人が日本の民族音楽とは全く異なるわがヨーロッパの音楽を理解する資質を備えており、またそれを伝える能力があることを私は確信した。橘女史は優雅に心をこめてショパンの「バラード」をピアノで演奏した。藤井女史はバッハとフランツとブレチ[19]のロマンスを数曲歌った際に、見事に響く快い声 —— ソプラノの力と優しさのすべてを発揮した。もし彼女がヨーロッパ行きを承諾すれば、彼女はかの地で自分の歌によって人気を博し、世間から広く認められるだろうにと私は確信する[20]。

ピウスツキが書いているように、1905年の東北地方は冷害による大凶作に見舞われた。とりわけ大きな被害を受けたのが宮城、福島、岩手の三県だった。宮城県の米の収穫は平年に比べて1割2分の出来高、福島県は2割4分、岩手県は3割3分の出来高だった[21]。1906年初頭の各新聞は凶作関係の記事が目につき、義捐金に関する情報が紙面をにぎわしている。ピウスツキが伝えたように、『萬朝報』は「同情袋」に白米を詰めて東北地方へ送ることを呼び掛け、それに応えて白米や見舞金が続々と集まる様子を「同情袋に対する同情」という欄で連日報道している。

ピウスツキが訪れた演奏会とは、宮城・福島・岩手県出身の早稲田大学の学生が組織した東北凶作地救済会が、1906年2月11日午後1時より上野の東京音楽学校（現東京芸術大学）で開催した慈善音楽会のことである。慈善音楽会はとりわけこの月に多く、9日から18日頃までほとんど毎晩開かれ、いずれも大入りだった[22]。なかでも11日の音楽会は豪華な顔ぶれで、「入場券も頗る売行好く且つ各国外交官等も多大の同情を寄せ臨席するもの多しと云ふ」[23]。諸新聞の記事を総合すると、当日のプログラムは次のとおりである。

「第1部」（1）開会の辞（2）常盤津、常盤松島（文字太夫、三登勢太夫、岸澤文字兵衛、岸澤八百八）（3）長唄、「甲」大薩摩、鞍馬山（芳村伊十郎、杵屋六左衛門）「乙」楠公（芳村伊十郎、杵屋六左衛門、岡安喜代八、杵屋勘五郎）（4）演説（大隈伯）

「第2部」(1)ピアノ独奏、バラード(橘糸重)(2)独唱、アリアフロムフリジョーフ(藤井環)(3)ヴアイオリン独奏、ローマンツエ、ガヴオツテ(プロフエツソル、ユンケル)(4)独唱、甲、ウイルストドウダインヘルツ、バツハ作、乙、エスハツトデイローゼー、フランツ作(藤井環)(5)ヴアイオリン、ピアノ合奏、ソナタインジーマイノル(ユンケル、フオンケーベル)[24]

当時は慈善音楽会のように聴衆を多く集めるためには洋楽だけでは収入に見込みがないため、邦楽を組み合わせた和洋折衷のプログラムにした[25]。入場料は一等2円、二等1円、三等50銭で、その収入はすべて救済に充てられた[26]。当日は、「聴衆頗る多く殊に高輪なる内親王殿下の御賁臨ありたるは誠に光栄のことなりし。〈中略〉全く終りたるは四時半なりき」[27]。

早稲田大学の東北凶作地救済会の会長をつとめた大隈重信の演説も、当日の呼び物のひとつだった。先に見たように、「日本より」のなかで大隈の名が繰り返し言及されていた。ここでも「この日本で最もリベラルな内閣の元首相で議会の進歩党の党首は、あらゆる社会事業や進歩的な企図に常に理解を示す。この人物は官僚制機構を敵とし、〈中略〉若々しい魂を持った尊敬すべき長老」と評されており、ピウスツキは日本の政治家のなかで大隈を最も高く評価していたと考えていい。なお大隈が批判した「政府」とは、この年の1月7日に成立したばかりの西園寺公望内閣を指す。

## V

日本人の演奏に関するピウスツキのコメントは、高度な音楽理解の自信に裏打ちされている。井上紘一氏は彼の子供時代を叙述しつつ、こう書いている。

また父親は折りにふれて趣味のピアノを家族に弾いて聞かせたと言う。ブロニスワ

「前列右端が藤井環(『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇』1、1987)」

フが後にサハリンで立証した「耳の良さ」も父のピアノのお蔭ではないかと思われる[28]。

ピウスツキが称賛した二人の女流音楽家のうちまず「藤井女史」とは、当時東京音楽学校研究科声楽2年に籍をおき、同時に「唱歌」の授業補助をつとめていた藤井環(たまき)のことである[29]。あるいは後に欧米各地で20年間に「蝶々夫人」の2,000回公演を成し遂げた三浦環（1884－1946）の若き日の姿と言った方がいいかもしれない。旧姓・柴田環は1900年に東京音楽学校予科に入学し、外国人教師ユンケルに声楽を学んだ。英国製の真っ赤な自転車で海老茶の袴に大きな蝶結びのリボンを風になびかせながら通学して、「自転車美人」と評判になった。当時若い女性が自転車に乗るなどは破天荒なことだったのだ。同年、陸軍三等軍医の藤井善一と内祝言を挙げる。在学中の1903年、日本最初のオペラ公演、グルックの歌劇「オルフェオとエウリディーチェ」にエウリディーチェ役で出演し、オペラ歌手として認められた。翌年に本科を卒業。1907年に声楽科の助教授となるが、1909年に離婚して、音楽学校を辞職。1911年に開場した帝国劇場歌劇部専属の主席歌手となった。1913年、東京帝国大学医学部助手の三浦政太郎と再婚し、翌年夫とともにドイツへ留学するが、第一次世界大戦が勃発。1915年にロンドン・オペラハウスでプッチーニ作曲の「蝶々夫人」を演じて大成功を収めた。これ以来日本最初の国際的プリマドンナとして世界を舞台に活躍した。

わが国では1872年に学制が発布されて近代教育制度が発足した。1879年に教育令が布告され、同年本郷の文部省内に音楽取調掛が設置された。1885年2月にそれが音楽取調所と改称され、上野公園内に移転。同年12月には再び音楽取調掛となり、1887年に東京音楽学校となった。1893年に高等師範の付属音楽学校に格下げとなり、その後再び独立したのは1899年のことである。

ピウスツキが環の独唱を聞いた東京音楽学校の奏楽堂は1890年に落成した。ホールは梁行16メートル、桁行26メートルで、客席は最初は長椅子、後には380席の固定席、小規模だが近代的な音響効果がその設計によって得られた。歌の上手、下手がはっきり表れるので、歌い手にとっては厳しい演奏会場だったという[30]。環の歌った曲のうち「アリアフロムフリジョーフ」は、マックス・ワルダウ作詞、フランツ作曲の「ある墓地(Ein Friedhof)」のことか。「ウイルストドウダインヘルツ、バツハ作」は、J・S・バッハまたはその子W・F・バッハ作曲の「ジョヴァンニのアリア『汝が心われにあたえずや』(Aria di Giovanni "Willst du dein Herz mir schenken")」である。また「エスハツトデイローゼー」は、アゼルバイジャンの詩人ミルザ・シャフィ作詞、ボーデンシュテット訳、フランツ作曲の「ばらは嘆いた（Es hat die Rose sich beklagt)」のことである。この時環は21歳。「もし彼女がヨーロッパ行きを承諾すれば、彼女はかの地で自分の歌によって人気を博し、世間から広く認められるだろうに」というピウスツキの評言は、現実とは逆のことを仮定する条件法の構文で表現されている。環がこの9年後にヨーロッパで華々しいデビューを飾るなどとは、ピウスツキには思いもよらなかっただろうが、結果としてこの言葉は彼女の将来を見事に予言したことになる。ヨーロッパ放浪の途次、彼が日本の歌姫の噂を耳にしたかどうか、あるいは再度彼女と会ったかどうかは不明である。

## Ⅵ

ピウスツキが感銘を受けたもう一人の女性演奏家、「橘女史」とは、当時東京音楽学校のピアノの教授だった橘糸重（いとえ）（1873－1939）のことである。糸重は1888年に東京音楽学校予科に入学し、ピアノを専攻。1892年に本科専修部を卒業後同校で教鞭をとった、ケーベル門下のピアニストである。「明治三十年前後の音楽会では、幸田女史［幸田露伴の妹・幸田幸（さち）］のヴアイオリンと相並んで、橘女史のピヤノが演奏の花形だった。」[31] ケーベルが東京音楽学校で嘱託講師としてピアノと音楽史を教えたのは、1898年から1909年までである。後にケーベルのギリシア古典方面の門弟・久保勉（まさる）は二人の師弟の交わりをこう書き残している。

> 橘さんが例のボーイの鈴木に案内されていとも静かに先生の部屋へ這入つて来、すこやかな先生の顔を見ると、いかにも嬉しそうににこ〳〵しながら先生と握手する場面を今なほあり〳〵と想ひ浮べることができる。〈中略〉こんな風で且つ共通の話題もさう多くはなかつたので、別に話がはずむといふ程でもなかつたに拘らず、主客の間には少い言葉と言葉との間に潜む互の心持が単に一緒にゐるといふことから以心伝心で充分に組取られる、と言ふよりも寧ろおのづからにして相通ずるといふ風であつた[32]。

糸重は音楽方面でケーベルに一番近しい弟子で、博士は自分の楽譜、音楽書、作曲草稿は彼女に譲ると遺言した。

また糸重は佐々木弘綱・信綱親子に師事し、雑誌『心の花』に短歌を寄せる歌人でもあった。島崎藤村研究家・伊東一夫氏は彼女の短歌をこう評している。

> 特に前近代的思想の流れをひく日本の多くの歌人のなかにあって、自我が鋭く追及され、存在の危機をひたむきに告白していることは、藤村の小説「破戒」と同じく、著しい近代性を示している。これらの歌が、自我または生のありかたを通して、人生の深淵にふれ、そこに生れる、孤独・寂廖・絶望などの実存的自覚の悲劇を、伝統的詩形において、素朴な、しかし沈痛な詠嘆として形象されていることは十分注意されなければならない。〈中略〉このようなきびしい自己否定の表現は、明治期には珍しく、罪の自覚におけるキリスト教的実存の陰影に濃く染めなされているのである[33]。

糸重が残した400首近くの句のうち一句紹介しておこう。

つまれけりすてられにけりふまれけり
　　すくせつたなき名もあらぬ花[34]

演奏会当日、佐々木信綱は糸重に次の二首を贈った。

人の世にいく年(とせ)ひめし真玉緒琴(またまをごと)
　　世にひゞくてふ飢人(うえびと)のため
み雪ふる陸奥山(みちのくやま)のうゑ人が
　　胸にひゞかむ清き調べの[35]

1898年、東京音楽学校選科下級ピアノ科に島崎藤村が入学した。糸重が彼にピアノを教えた縁で、二人の間に親交が生まれ、恋愛感情の存在も指摘されている。藤村の詩集『落梅集』には糸重の存在が影を落としており、小説『水彩画家』のバイオリニスト柳沢清乃と、『家』のピアニスト曽根千代のモデルは彼女とされている[36]。糸重は生涯独身を通した。1937年には佐々木信綱とともに第一回の帝国芸術院会員に任ぜられた。

## Ⅶ

雑誌『音楽』の1906年4月号に「露国人類学者ピルドウスキー」と題する次のような記事が掲載されている。

> 目下来遊中の露国人類学者ピルドウスキー氏は流石に本場育ちとて音楽の嗜みも浅からざる由なるが去る紀元節の上野音楽学校慈善音楽会に赴きての評と云ふを聞くに彼は幾多の楽人中橘糸重女史を以て歌人にも勝れたる名手なりと感心し其餘りにや近々中同女史に書状を以て交際を求めんと欲する旨語りつゝありき[37]

これをピウスツキは実行に移した。彼に宛てた糸重の返信が2通、前記「ピウスツキ・マニュスクリプト」中に含まれていたのである。次にそれを紹介しよう。

### 1．1906年2月20日付の書簡

［封筒　表］　京橋区尾張町
　　箱館屋方
　　ブロニラウ、ピルスドスキー様
［封筒　裏］　［東－破れてこの字なし］京音楽学校ニテ
　　橘糸重
［消　　印］　2月21日

御禮との御手紙たまはりありがたく
拝見仕候
去十一日の演奏会に私のはかなき
すさび御きゝ下され候よし　われながら
心にみたぬふしのみにて作曲者に
對しても罪浅からずと心苦しく

ぞむじ居候を過分の御ほめにあづかり
何となく恐入候　いさゝかたりとも御心に
叶い候はまことに望外の喜びに
御座候　されども今は決して〳〵私の
功にてはなく全く曲そのものゝ美と
常にをしへをうけ居候ケーベル先生の
御恵による事とぞむじ候
猶又御祖国の御さま御父君の
御話など御きかせ下されありがたく志らぬ
とほきさかゐまでさま〳〵於もいやられ
まをしく
終りに御健康を祝し上候
まずは右御返事
まで
二月　かしこ
二十日
雨の音を
きゝつゝ

橘　糸重
拝

ブロニラウ、ピルスドスキー先生
御まへに（4648：2－3、33）

この書簡から、ピウスツキが糸重に礼状を送り、その演奏をほめたたえたことが分かる。彼女の演目は「ショパンの『バラード』」だった。それは恐らく「バラード第一番ト短調」だろう。彼女はショパンとブラームスを得意にし、好みでもあった[38]。書簡4行目の「われながら」から13行目の「ぞむじ候」まではまるで女学生の文面のようだが、当時糸重は32歳で教授の地位を占めていた。だがこのセリフは多少の謙遜を差し引いても、彼女の性格と厳しい音楽観が言わしめた本音と解すべきである。生き方の苦悩がにじむ彼女の歌を一句引用しておく。

なりはひはかなしかりけりあやまちて
ピアノ人（ママ）となりしいくとせ[39]

「常にをしへをうけ居候ケーベル先生の御恵」に糸重が言及していることも確認しておきたい。この音楽会にはケーベル自身も出演し、ユンケルのバイオリンと「ソナタインジーマイノル」[40]を合奏した。ケーベルは東京音楽学校以外の普通の演奏会には出なかったが、

報酬をとらない慈善音楽会にだけは出演した[41]。この文面からして、ピウスツキはケーベルなる人物についてある程度の知識を備えていたと考えてよい。この時ケーベルは東京帝国大学と東京音楽学校以外に東京外国語学校でも教鞭を執っていた。これは日露戦争によってロシア人講師がいなくなったための代役だった。東京外国語学校の「外国教師」就任期間は1904年9月から1906年9月までの2年間のみである[42]。後にピウスツキはザコパネから二葉亭にこう書きよこしている。

> 幾度か日本について考えました。当時私に幾つも申し入れられた、学校で教える仕事をなにゆえ引き受けなかったのかと、今悔んでおります[43]。

この音楽会の7ヵ月後に講師をやめたことからして、ケーベルには外国語学校で教鞭を執り続ける意思はなかったものと推察される。恐らくピウスツキに外語講師就任の要請があったのだろう。

「御祖国の御さま御父君の御話など御きかせ下され」という一節もおもしろい。糸重が演奏したショパンは言うまでもなくポーランド人であり、「御祖国の御さま」は多分二人の間にその話題が出たことを物語っている。また前述のように、ピウスツキの幼年時代に父親が折りにふれて趣味のピアノを家族に弾いて聞かせた。「御父君の御話」はそれに関わることだろう。

封筒の「箱館屋」は1874年開業の、氷と牛乳と洋酒類を扱う日本のバーの元祖ともいうべき店である[44]。店の主人は信大蔵（しんたいぞう）という人物。もと尾張藩江戸詰の武士で、榎本武揚に従って五稜郭の戦いに参加し、銃弾を6発受けたという前歴を持つ。ウラジヴォストーク方面のロシア人と取り引きがあり、亡命外国人や旧幕臣が常にたむろしていた[45]。ピウスツキは東京滞在中この店の2階に居をすえていた。木下尚江は二葉亭との会見をこう回想している。

> 何時も銀座の箱館屋と云ふ店の二階で会つた。薄暗い、まるで地下室か巌窟かのやうな閑かな一室[46]。

## VIII

### 2．1906年2月27日付の書簡

［封筒　表］　牛込区市谷加賀町一の一五
　　上田　将様にて
　　［ブロー破れてこの2字なし］ニラウ　ビルスドスキ様
［封筒　裏］　橘糸重
　　拝
［消　　印］　読み取り不能

ふたゝび御状かたじけなく拝し上候
御作の於もむき何とも恐入候　折角の
御言葉に御こたへいたす筈には候へど
わたくしなどの写真あまりいかゞはしく
且はたゞいま手元に一葉もなく　これより
作らせ候にては御帰国の御間にもあふ
まじくぞむじ候まゝ学校の人々と
ともに写し候ものさし下し申べき
やとぞむじ候へど御思召いかゞにや
うかゞい上候
かしこ
二十七日
橘　糸重
拝

ビルストスキ様
御許（4648：4、34）

この書簡からは、ピウスツキが即座に第二信を糸重に送ったこと、そこで彼女の写真を要求したことが分かる。これは糸重にとっては気の重い要求だったにちがいない。彼女の写真嫌いは、『心の花』の同人や東京音楽学校の教え子がことごとく口をそろえる有名な事実である。例えば、

「橘糸重（『東京芸術大学百年史　演奏会篇』1、1990）」

橘さんは写真を撮るのが一番嫌であつた。会の記念写真などには、いつも最後の列に加はつてゐて、パッとシャッターを切つた時には、すつとしやがんで了ふ。偶々少数で前の方に居なければならぬ時は、見事にうつ向いて了ふ。その時刻を観ることのうまさ。斯くて正面をきつたのがありとすれば、立派に国宝的存在といつて宜い位のものだ[47]。

筆者は糸重の写っている写真を全部で11葉見たが、そのうちカメラを見つめている「国宝的存在」のものは2葉のみだった。「学校の人々とともに写し候もの」は、卒業写真かなにかだろう。ピウスツキの遺品中に糸重の写真は見当たらず、彼女が最終的に彼の依頼に応えたかどうかは不明で

ある。もっともピウスツキは他の日本女性に対しても同じ要求をしていたようで、そのような写真が1葉残っている（4648：51-52）。

「これより作らせ候にては御帰国の御間にもあふまじくぞむじ候まゝ」というくだりも見逃せない。ピウスツキはこの後長崎へ行き、同地で汽船「ダコタ」号に乗り込んで横浜を出港するのはこの年の8月3日のことだが、比較的長期にわたる日本滞在が当初からの予定ではなかったことが分かる。同年2月8日の『東京朝日新聞』に「露国人類学者」と題してピウスツキに関する記事が掲載されているが、その後半部にも次のような記述が見られる。

> 尚同氏［ピウスツキ氏］は本月中を日本の研究に費し一度故郷の波蘭に帰り夫より再び樺太に渡りて引続き人種学上の研究に従ふ筈なりと

封筒の「上田将」は日本ハリストス正教会の神学校でロシア語を学び、正教会の出版社「愛々社」の翻訳員となって数多くの教書などを訳出した人物である[48]。『日露実用会話』（1903）、在日ロシア人俘虜のための『日露会話捷徑』（1905）のような著書もある。当時は『東京日日新聞』の記者で、ロシア人革命家が長崎で出していたロシア語の新聞『ヴォーリャ』の東京での予約購読と広告の受け付けをしていた。1906年11月の、孫文と革命的社会主義者党の創設者ゲルシューニの会談の通訳をつとめたのも彼だろう[49]。上田はピウスツキの論文「樺太アイヌの状態」を日本語に訳して、雑誌『世界』に掲載した[50]。

「ピウスツキ・マニュスクリプト」中に上田がピウスツキに宛てた手紙と葉書が一通ずつ残っている。手紙は1906年7月19日付のもので、自分は長崎に行けないこと、『モンゴルとモンゴル人』の翻訳を頼まれたこと[51]、現在ニコライ主教が正教会の司祭と伝教者を東京に集めており、湊氏が色丹島から到着したこと、ガルフィルド氏が今朝横浜から長崎に向かったこと、自分はよく箱館屋に寄ってピウスツキのうわさをしていたこと、横浜に停泊したら電報を打ってほしいこと、『世界』誌は既にピウスツキに発送済みであり、『世界』次号用の他の鉛版が出来上がった時点で鉛版を送るつもりであることを伝えている（4646、t. 1：81-82）。

葉書の方は1907年7月1日付で、ピウスツキから手紙を受け取ったこと、ポドパーフが家族と東京にいて、ロシアの諸新聞のために特派員通信を書いており、日本の新聞からの翻訳を自分が手伝ってやっていること、『ジャパン・タイムズ』と社会主義者の雑誌の近刊をピウスツキに送ったこと、最近神保［アイヌ研究家の神保小虎か］氏に会い、彼がピウスツキの手紙を受け取ったと言っていたことを伝えている（4646：80）。なお葉書の方の署名は「M・ウエダ」になっているが、筆跡からしてこれは明らかに同一人物であって、「M」は上田の洗礼名「マトフェイ」を指すのだろう[52]。

「ピウスツキ・マニュスクリプト」には宛先が上田になっている手紙がもう一通残っている。それは早稲田大学で西洋史を講じていた煙山専太郎の、1906年2月25日付の手紙である。これは上田とピウスツキの面会申し込みに対する返事で、2月28日の水曜日午後1時に早稲田大学で会おうという趣旨のものである（4648：8）。

これらの上田宛書簡からして、ピウスツキの東京滞在中上田が彼を色々な場所に案内し、

様々な人々に引き合わせていたことが推測される。上田はピウスツキ宛の葉書で、ポドパーフのために日本の新聞の翻訳を手伝っていると書いていたが、ピウスツキが『極東の自然と人々』に「日本より」を連載する際にも同様の援助がなされたのかもしれない。従来ピウスツキに対する二葉亭の物心両面にわたる援助ということが指摘されてきた。それはその通りだが、ピウスツキの日本滞在において上田が果たした役割をもっと高く評価すべきである。

ピウスツキは既にサハリン時代に日本語に接する機会があった。著書『樺太アイヌの言語とフォークロアについての研究資料』の序文で彼はこう書いている。

> 日本語については全く素養のない身でありながら、私は露日ポケット辞典を使うことを余儀なくされ、コルサコフ〈大泊〉に住む日本人紳士たちに協力を乞うことも少なくなかった[53]。

また鳥居君子がピウスツキに書いた手紙が、フランス語混じりのローマ字表記の日本語であるのもおもしろい(4648：7、47；4648：28；4646、t.2：5-6)。これらの事実からしてピウスツキは少しは日本語を解したようだが、達筆で認められた糸重の2通の手紙は上田がロシア語に訳出してやったのだろう。

## Ⅸ

ピウスツキが交友を求めた日本女性は橘糸重と鳥居君子だけではない。1906年3月20日の『北海タイムス』紙に「外人の日本婦人研究」と題する記事が載っている。それによると、ピウスツキの東京滞在の目的は日本婦人の研究であって、彼は「朝野の才媛貴女」を訪問しては次のような質問を試み、いずれ一冊の本にまとめる予定だという。

> ▲日本婦人が政府に向かつて参政権を要求するに至りし真意▲世界各国の婦人に比して日本婦人の優美なる理由▲日本婦人の結婚思想▲日本婦人の職業問題に於ける意見▲一般婦人の穢多又は非人に対する感情及び所為▲非人又は穢多社会の婦人の現状▲現今日本婦人の教育程度に関しての意見
>
> 其他交戦中の日本婦人活動の実況、婦人界一般に流行する俗謡等……

第二の質問、「世界各国の婦人に比して日本婦人の優美なる理由」はおもしろい。ピウスツキがどの程度本気でそう考えていたのか定かでないが、後にクラクフから二葉亭に宛てた手紙にはこう書いている。

> しかし、もしもエネルギッシュで（日本女性ならむろんみなかわいくて善良でしょう)、自身こちらへやって来てもし失望したら帰国できるだけの資力をもった婦人がみつかれば、私はしばらく待って、あなたの選択眼を信じて陽の昇る国の婦人を伴侶に選び、われらの未来の永遠の友情を実質的に強めるでしょうに[54]。

同年3月9日の『報知新聞』にも「日本婦人の研究（波蘭人ピルスドスキー氏）」と題する記事が掲載されている。内容は上の記事とほぼ重複するが、質問事項として上記以外に看護婦になる婦人の目的、青年女性の愛読書が挙がっている。

当時、女性の苦しんでいる様々な問題の根本的な解決は社会主義以外にはありえないことを訴え、婦人層を結集しようとする運動がわが国で展開されていた。ピウスツキはこのような婦人運動家とも交際を持った。例えば福田英子、今井歌子、遠藤清（きよ）。福田はキリスト教派の社会主義者。今井は月刊誌『二十世紀の婦人』の事務を引き受け、やがて社会主義者と交渉を持つようになって、婦人に政治上独立の人格を認めない治安警察法第五条改正の請願運動を、福田と共に展開した人物である。この運動を支えたのが遠藤で、後の『青踏』同人である。日本婦人論を一本にまとめるというピウスツキの目論見は実現しなかったが、彼はガリチアに戻った後市民大学で日本婦人について公開講演を行った(55)。

ケーベルは日本婦人について次のように述べている。

> 日本婦人は――私の知れる限りでは――西洋婦人に比して幾多の長所をもっている。その最大なるものは、即ち彼らがいわゆる『淑女（ダーメン）』でなくして、女（ワイバー）または婦人（フラウエン）――男に対する自分たちの自然的ならびに社会的位置を意識しており、かつその他の何ものであろうとも欲しない（少くとも現在では！）ところの――であるということである。――尤も日本においても既に時折は『新しい女』を説くのを聴き、私もこの『理想』の二三の実例を見たことはある。が、しかしその背後にはなんら真面目なるものが潜んでいない。それはむしろかの日本においてきわめて喜ばるゝ『近代的なるもの』との遊戯三昧の一つと見るべきである。即ち彼らには、何であっても、たゞ『近代的』でさえあればよいのである！〈中略〉
>
> 私の知れる、善良、賢明にして、教養を求めておりかつこれに堪える日本婦人は、『婦人問題』をば自分では既に解決している。それも、私の考えるところでは、それがヨーロッパにおいてのみならずまた一般にも解かれうる唯一の正しき仕方において、即ち騒を起すことなく、その落著いた、何びとの厄介にもならない、謙譲な、一つの有用な活動をもって充されたる生活によって。〈中略〉
>
> 私にしてもし今四十ばかり若くかつ結婚をするという考を抱いていたならば、私はひとりドイツ婦人かしからざれば日本婦人を選ぶであろう。無論後者は『西洋婦人』を気取ってはならない。彼女の教養とまた自身の娯楽とのためにする音楽［こゝにいう音楽はいうまでもなく西洋音楽を指す］は彼女に許されるであろう、しかしながら『専門演奏家』として公に出演することは全然禁ぜられるであろう(56)。

ケーベルの発言の前半部は、「近代的」を装う「新しき女」たちに対する明らかな批判である。また最後の部分、自分の配偶者は「専門演奏家」であってはならないというくだりは、間接的に三浦環の生き方への批判となりうる。事実彼はその後の環とは没交渉だった。では橘糸重はどうか。久保勉はこう書いている。

> 先生［ケーベル］が『小品集』の中で、『私の知れる、善良、賢明にして、教養を求

めて居り且つこれに堪へる日本婦人』とか、『騒を起すことなく、その落著いた、何人の厄介にもならない、謙虚な活動を以て充された生活をする日本婦人』とか書いた時、先づ第一に念頭に浮んでゐたのは恐らく橘さんであつたに違ひない[57]。

ピウスツキは日本の婦人をどのように観ていたか。この問いに対する彼の直接の回答は見当たらないが、ケーベルとはかなり異なるものだったことは間違いない。ケーベルが手厳しく批判した「新しき女」、即ち女性社会運動家たちにピウスツキは積極的にアプローチした。そしてその質問事項からして、ピウスツキが彼女らの運動を肯定的に捉えていたことも確かである。彼はガリチアに戻って事実上の夫婦となったマリアを、ケーベルの嫌う「専門演奏家」にしたいと考えていた[58]。

ではピウスツキの観た橘糸重はどうか。本稿で紹介した彼女の第一信は、恐らくピウスツキにとって意外なものだっただろう。優れたピアニストであるばかりでなく、「歌人にも勝れたる名手なりと感心し」て彼は手紙を書いたわけで、全く別個の女性像を脳裏に描いていたはずだが、返ってきた返事は予想外の、徹頭徹尾謙遜の念のこもった内容のものだった。仮にこれが藤井環であれば、このような返事は決して書かなかっただろう。だが逆にピウスツキは糸重との文通によって、日本女性の異なった側面に触れることができた。日本に短期間滞在した者としては、むしろ社会に突出した女性、「近代性」を標榜する「新しき女性」に接する機会は多くても、保守的、伝統的思考法の女性、まして徹底的な自己否定の女性と接する機会は少なかったのではないか。その意味で糸重との文通は、この実に好奇心旺盛なポーランド人の興味を引き、彼にとって日本婦人研究の貴重な材料となったにちがいない。

本稿執筆に際し、サハリン州立郷土博物館（ユジュノ・サハリンスク）のB・M・ラティシェフ、アムール地方研究協会（ウラジヴォストーク）のA・A・ヒサムヂーノフ、秋月孝子、石垣香津、井上紘一、小松美沙子、沢田梢、島尻政長、清水恵、長縄光男、中村喜和、浜野アーラ、宮本立江、矢崎正夫の各氏と、日本近代音楽館、早稲田大学大学史編集所より貴重なご教示と資料を賜った。またアムール地方研究協会図書館、国立国会図書館、埼玉大学図書館、一橋大学図書館、北海道大学スラブ研究センター、早稲田大学現代政治経済研究所、早稲田大学図書館で資料の収集を行った。記して感謝の意を表する。

## — 注 —

1　日付は特記しない限り新暦で統一した。

2　ピウスツキの生涯とその日本滞在については、拙稿「ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と明治日本」『ポロニカ』4、1994年、20-37頁、を参照のこと。

3　マトヴェーエフについては、檜山真一「親日亡命ロシア人ニコライ・マトヴェーエフ」原暉之・外川継男編『講座スラブの世界⑧　スラブと日本』弘文堂、1995年、187-213頁、を参照のこと。

4　Л. Я. Иващенко, *Послесловие к изданию:Николай Петрович Матвеев — кто*

*он?..*, Владивосток, 1991, стр. 9, 14.

5 А. А. Хисамутдинов (сост.), *"...С полным забвением и любовью..." К 125-летию со дня рождения Бронислава Осиповича Пилсудского*, Владивосток, 1991.

6 この日付は旧暦で、新暦では11月26日になる。

7 北海道大学スラブ研究センター所蔵マイクロフィルム Piłsudski Manuscript. ポーランド科学アカデミー図書館（クラクフ）の整理番号 Rękopis sygn. 4646, t. 2, p. 55. 以下、本「マニュスクリプト」からの引用は本文中の括弧内に整理番号を記す。

8 『馬関毎日新聞』1906年1月10日、第2面。『北海タイムス』1906年1月10日、第1面。

9 以下、『極東の自然と人々』の発行日は旧暦によっており、新暦に直すには13日を加算すればよい。

10 *Природа и люди Дальнего Востока* 〔*Восточная неделя*〕, No. 2, 5 февраля 1906 г., стр. 16.

11 ラティシェフ氏は「日本より」の掲載号数として第7－10、14－15、21、23－24号を挙げている。第4－5号についてはさておき、第20号は明らかに氏の見落としである。また「モンゴルの覚醒」については言及がない。Бронислав Пилсудский, "Поэзия гиляков." Предисловие В. М. Латышева, *Краеведческий бюллетень*, Сахалинский областной краеведческий музей, 1990, No. 1 стр. 110.

12 鳥居きみ子「蒙古行　道すがら（其一）」『読売新聞』1906年3月8日、第3面。

13 *Природа и люди Дальнего Востока* 〔*Восточная неделя*〕, No. 24, 9 июля 1906 г., стр. 3-4.

14 1月15日に細川潤次郎文事秘書官長の「埃及（えじぷと）と英国との関係」、三島毅東宮侍講の「詩経大雅蕩之什江漢篇」、猪熊夏樹の「日本書記神武天皇四年二月之條」の三つの進講があった。『毎日新聞』1906年1月16日、第2面。『読売新聞』1906年1月16日、第1面。

15 『光』1－9、1906年3月20日、第5、7面。

16 『光』1－13、1906年5月20日、第2面。

17 安井亮平「二葉亭四迷のロシヤ人・ポーランド人との交渉」『文学』34－8、1966年8月、22－25頁。安井亮平翻刻・訳「二葉亭四迷宛ピウスツキ書簡」『二葉亭四迷全集』別巻、筑摩書房、1993年、114-164頁、を参照のこと。

18 『光』1－15、1906年6月20日、第2面。

19 「フランツ」はドイツの作曲家にして教会オルガン奏者、指揮者のロベルト・フランツ (Robert Franz, 1815-1892)。「ブレチ」(Брэч) は不明。あるいはドイツの作曲家にして指揮者のマックス・ブルッフ (Max Bruch, 1838-1920) のことか。

20 *Природа и люди Дальнего Востока* 〔*Восточная неделя*〕, No. 8, 19 марта 1906 г., стр. 5-6.

21 小野武夫『現代日本文明史　第九巻　農村史』東洋経済新報社、1941年、544-545頁。

22 幽弦郎「楽壇雑観　慈善音楽会」『音楽新報』3－2、1906年3月、33頁。

23 『報知新聞』1906年2月11日、第2面。

24 『東京朝日新聞』1906年2月7日、第4面。『東京二六新聞』1906年2月7日、第3面。『読売新聞』1906年2月7日、第1面。『萬朝報』1906年2月7日、第3面。『東京日日新聞』1906年2月11日、第4面。
25 田辺久之『考証　三浦環』近代文藝社、1995年、66-67頁。
26 例えば、『東京二六新聞』1906年2月7日、第3面。
27 『早稲田学報』130、1906年3月、72頁。
28 井上紘一「ブロニスワフ・ピウスツキの不本意な旅路」『国立民族学博物館研究報告別冊』5、1987年、46頁。
29 『東京音楽学校一覧　従明治三十八年至明治三十九年』1906年、68、69頁。
30 田辺、前掲書、45、82頁。
31 小花清泉「橘糸重女史を懐ふ」『心の花』43-10、1939年10月、5頁。
32 久保勉『ケーベル先生とともに』岩波書店、1951年、135-136頁。
33 伊東一夫『島崎藤村研究－近代文学研究方法の諸問題－』明治書院、1969年、360-361頁。
34 藤田福夫『近代歌人の研究－歌風・風土・結社－』笠間書院、1983年、295頁。
35 『東京二六新聞』1906年2月11日、第1面。
36 例えば、伊東、前掲書、346-365頁、藤田、前掲書、290-312頁、安田保雄「比較文学ノート（五）－藤村詩と橘糸重－」『成蹊国文』19、1986年、1-15頁、を参照のこと。
37 『音楽』9－6、1906年4月、42頁。
38 多賀谷千賀「亡き先生」『心の花』43－10、11頁。
39 藤田、前掲書、299頁。
40 バイオリン "Sonata in G Minor（ト短調）"のことだろう。作曲者は不明。
41 久保勉「ケーベル先生を語る」『図書』263、1971年7月、32頁。
42 『東京外国語学校一覧　従明治卅七年至明治卅八年』1904年、19頁。『東京外国語学校一覧　従明治卅八年至明治卅九年』1905年、19頁。
43 1907年10月24日（新暦11月6日）付、『二葉亭四迷全集』別巻、147頁。
44 小島津満江「銀座年表－書誌を中心に－明治編－」『銀座文化研究』1、1986年、50頁。銀座文化史学会編　石川幸恵担当「明治35年　銀座の住人その4」『銀座文化研究』4、1989年、95頁。箱館屋は現在の中央区銀座6丁目9－8の婦人服店「銀座マギー」のある所にあった。
45 野口孝一「ピウスツキと銀座の函館屋」『北海道新聞』夕刊、1985年12月12日、第7面。
46 木下尚江「長谷川二葉亭君」『神・人間・自由』中央公論社、1934年、244頁。
47 石榑千亦「橘糸重さん」『心の花』43－10、4頁。
48 山川令子「うえだすすみ　上田将」『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、162頁。ちなみに「将」を「スゝム」と読む説もある。堀川柳人編『帝政ロシア邦文書目』非売品、1939年、14頁。
49 和田春樹『ニコライ・ラッセル　国境を越えるナロードニキ』下、中央公論社、1973年、114、156-157、206頁。

50 露国ビルスドスキー氏寄稿「樺太アイヌの状態」(上)・(下)『世界』26、1906年7月、57-66頁。27、1906年8月、42-49頁。

51 後に、ポズドネェフ原著、東亜同文会編纂局翻訳『蒙古及蒙古人』東亜同文会、1908年、として出た翻訳のことだろう。同書、「凡例」2頁、堀川柳人編、前掲書、14頁、を参照。

52 中村健之介・中村喜和・安井亮平・長縄光男編『宣教師ニコライの日記』北海道大学図書刊行会、1994年、139頁。

53 北海道ウタリ協会札幌支部アイヌ語勉強会訳「樺太アイヌの言語と民話についての研究資料＜1＞」『創造の世界』46、1983年5月、106頁。

54 1906年11月21日（新暦12月4日）付、『二葉亭四迷全集』別巻、123-124頁。

55 1907年5月10日(新暦5月23日)付のピウスツキの二葉亭宛書簡、『二葉亭四迷全集』別巻、133頁。

56 久保勉訳編『ケーベル博士随筆集』岩波書店、1928年、107-109頁。

57 久保勉『ケーベル先生とともに』、137頁。

58 1907年10月5日（新暦10月18日）付のピウスツキの二葉亭宛書簡、『二葉亭四迷全集』別巻、142頁。

# Япония глазами Бронислава Пилсудского

## — Его знакомство с музыкантками Токийской музыкальной школы —

**Кадзухико САВАДА**

Н. П. Матвеев, первый русский уроженец Японии, издавал во Владивостоке еженедельный журнал "Природа и люди Дальнего Востока [Восточная неделя]" с 29-го января по 30-е июля 1906 г. (всего вышло 27 номеров). В этом журнале было опубликовано несколько статей польского революционера и этнографа Бронислава Пилсудского (1866-1918): "Южный Сахалин под властью японцев" (No. 4-5), серия репортажей под общим заголовком "Из Японии" (No. 4-5, 7-10, 14-15, 20-21, 23-24) и "Пробуждение Монголии" (No. 21). Также там была помещена статья "Б.О. Пилсудский среди инородцев" (No. 24), автор которой неизвестен. В серии статей "Из Японии" Пилсудский, обращаясь к самым разнообразным темам, рельефно отображает нюансы японской жизни сразу после русско-японской войны, что позволяет говорить о широте его интересов как этнографа и революционера.

Так в статье в восьмом номере журнала сообщается о неурожае в северных префектурах острова Хонсю и о том, что для помощи пострадавшим были устроены сборы пожертвований и ряд благотворительных концертов. Далее Пилсудский делится впечатлениями об одном из этих концертов, который предварила пламенная речь графа Окума, и особенно отмечает изящное исполнение на рояле г-жой Тачибана "Баллады" Шопена и замечательное исполнение г-жой Фуджии романсов Баха, Франца и Брэча. Благотворительный концерт, о котором пишет Пилсудский, был устроен 11-го февраля 1906 г. в Токийской музыкальной школе (ныне Токийской академии художеств) по инициативе студентов университета Васэда — уроженцев пострадавших префектур. В серии "Из Японии" неоднократно упоминается Окума Сигэнобу, имя политика и основателя университета Васэда, а его деятельность неизменно высоко оценивается автором, что дает основания предположить, что Пилсудский считал Окума одним из самых выдающихся политиков в Японии.

"Г-жа Фуджии", похваленная Пилсудским, — это Фуджии Тамаки (1884-1946), которая в то время училась на высших курсах по классу вокала и одновременно преподавала пение в качестве ассистентки. Или, может быть, лучше сказать, что это будущая Миура Тамаки, 2000 раз в течение 20-ти лет исполнявшая партию героини в опере Пуччини "Мадам Баттерфлай" на сцене многих театров мира. В то время Тамаки было 21 год. О ней Пилсудский пишет:

"...если бы она согласилась поехать в Европу, то я уверен, что она приобрела бы там своим пением популярность и всеобщее признание."

Конечно, Пилсудский никак не мог знать, что через 9 лет Тамаки с успехом будет дебютировать в Лондоне в оперном театре. Однако можно сказать, что его слова прекрасно предсказали блестящее будущее певицы.

Другой исполнительницей, “г-жой Тачибана”, была Тачибана Итоэ (1873-1939), профессор по классу фортепиано в Токийской музыкальной школе. Она занималась под руководством русского немца, философа и музыканта Р. Кебера. Кроме того, Итоэ писала стихи. Ее “танка” (краткое стихотворение размером в 5-7-5-7-7 слогов) проникнуты ощущением кризиса бытия и самоотрицанием. Итоэ прожила всю свою жизнь незамужней.

В “Рукописях Б. Пилсудского”, хранящихся в Кракове в библиотеке Польской академии наук, есть два письма Итоэ к Пилсудскому. Одно из них (от 20-го февраля 1906 г.) — ответ Итоэ на благодарственное, полное восхищения ее игрой письмо Пилсудского — ответ, исполненный скромностью. Но надо сказать, что это ее истинная скромность, происходящая из ее характера и строгого взгляда на музыку. В то время Кебер преподавал философию в Токийском имперском университете, вел класс фортепиано и теории музыки в Токийской музыкальной школе, а также русский язык в Токийском институте иностранных языков. Через 7 месяцев после этого концерта Кебер ушел с должности преподавателя в институте и можно предположить, что Пилсудскому предложили эту должность, но он отказался от этого предложения.

Из другого письма Итоэ от 27-го февраля 1906 г. становится ясно, что Пилсудский вслед за первым послал ей второе письмо с просьбой о фотографии. Это была, должно быть, нежелательная просьба для Итоэ, не любившей фотографироваться. По содержанию этого письма также видно, что Пилсудский по первоначальному плану намерен был оставить Японию раньше. Это второе письмо Итоэ от 27 февраля адресовано Уэда Сусуми (или Сусуму). Уэда изучал русский язык в Православной духовной семинарии в Токио. В то время он работал журналистом и оказывал помощь русским революционерам. Можно предположить, что во время пребывания Пилсудского в Японии Уэда сопровождал его в разные места и знакомил с разными людьми. По-видимому, Уэда перевел на русский язык и оба письма Итоэ.

Как этнограф и революционер, Пилсудский за время своего короткого 8-месячного пребывания в Японии не мог не обратить внимание на зарождавшееся в стране женское движение. Он был знаком с социалистками, неоднократно встречался с “новыми женщинами” и, судя по его вопросам к ним, оценивал их деятельность положительно в отличие от Кебера. Вероятно, разносторонняя одаренность Итоэ рисовала Пилсудскому совсем другую женщину, и потому крайне скромное содержание ее ответного письма было для него неожиданным. Однако заочное знакомство с Итоэ позволило увидеть женщину традиционного склада мысли и консервативного поведения, даже самоотрицания. В этом смысле переписка с Итоэ послужила Пилсудскому драгоценным материалом для понимания японских женщин.